

That's the life

六年 M・K

六年生という受験を控えた忙しい時期に留学することを決断した理由は、自分探しの旅がしたかったから、というとかっこいいですが、毎日机に向かってカリカリと勉強をしている生活から逃げたくなかったからというのが本音でした。いわゆる、現実逃避です。軽率だと思われるかもしれません。

留学というものに元々興味があったのももちろん事実です。人とコミュニケーションをとることが苦手な私は、中学の時はそれが原因で不登校でした。少しずつ授業に出られるようになっていっても、コミュニケーションを中心とする英会話の授業だけは、どうしても苦手でした。でも、良い成績を取りたいという欲望のために頑張って参加していました。無理矢理にでも喋っていたという感じでした。その努力の結果なのか、高校一年生の時のプレゼンテーションで先生に褒めていただいた時は本当に嬉しくて、英語を話すことが初めて楽しいと思えました。外国語を学ぶ楽しさを知った私は、英語は勿論のこととにかく外国語を学んで喋る機会がほしいと思い、留学したいと強く思うようになりました。私が選んだAFSのルールでは、留学する生徒は留学する国を選ぶことはできません。その代り、希望国を言うことはできました。私は、語学力などは一切考えず、ただ行きたい国として、イタリア、スペイン、コスタリカを希望国として提出するつもりでした。私はひねくれた性格なので、人気があるものには魅力を感じません。AFSでは、アメリカはとても人気で、希望する人がとても多かったので、アメリカを希望国にするつもりはありませんでした。しかし、六年近く習ってきた英語の実力を発揮できると思いましたし、留学に興味を持つきっかけとなったのが英語だったので、英語圏である他二カ国ニュージーランドとオーストラリアとともにアメリカを一番下の希望国欄に「一応」と思いながら書きました。書類選考、筆記試験、面接の結果、希望国最下位なのにも関わらずAFSからアメリカに行くように言われました。

日本人の全くいないアメリカの田舎に行き、文字通り、浸るようにアメリカ文化に触れる日々は本当に一秒一秒が充実していました。学校が始まった時は、緊張のあまり硬直し、下を向いてばかりいました。私のこの真面目っぽい見た目も原因の一つで、友達はなかなかできませんでした。英語も全く分からず、生徒の輪に入ろうと思っても、思うようにいきませんでした。とにかく授業に

追いついていけば、先生やクラスメイトが授業中話している話題にだけはついていけるだろうと思った私は、毎日放課後、各教科の先生の所に質問に行ったり、留学生担当の英語の先生の教室へ行き、授業の復習をしたりしていました。その先生の教室では毎週木曜日、小規模のキリスト教の生徒の集会があったのですが、私は何も知らず、いつものようにその教室へ行って自習する予定でいました。しかし、その集会のメンバーたちは勉強している私に話しかけてくれ、アメリカについて、学校のシステムについて、分からないことを沢山教えてくれました。彼らと一緒にいる時間はとても楽しく、毎週その集会に顔を出すようになり、私の友達の輪は少しずつ広がり、学校生活を楽しめるようになりました。

ホストペアレンツは共働きでホストブラザーも家にいることがあまりありませんでした。私は一人でいる時間を有意義に使いこなすことが苦手だったので、なるべく学校の活動に参加することにしました。先程話した毎週木曜日のキリスト教徒の活動に加え、学校の水泳チームに所属しました。小学校の頃に習っていたとはいえ、私は全然上達することはなく、ひたすら初心者の人達と自分たちのペースで泳いでいました。それもまた友達を作るいい機会となりました。水泳の他、美術部などの活動やミュージカル、タレントショーなどといった学校の行事になるべく参加して、充実した学校生活を送り、たくさんの思い出ができました。そのお蔭で、私は学校でとても有名になったようで、知らない人から話しかけられることも増えました。二月頃は、朝は美術部のミーティング、授業を終えて、放課後は水泳の練習が三時間、そのまま車で移動しながらハンバーガーかサンドイッチを夕飯に食べてミュージカルの練習を四時間、十時に帰宅し勉強、と本当に忙しかったのですが、その中で自分と全く同じ動きをしている人と出会い、その人ととても仲良くなることができたので、今思うと楽しかったと思えます。

これだけだと楽しい話ばかりに聞こえるかもしれませんが、辛いこともたくさんありました。仲の良い友達ができたとはいいましたが、その感覚は私からの一方的なものばかりで、彼らにはちゃんと別に親友と呼べるような人たちがいました。もちろん、一緒に出掛けたりメールしたりすることはありましたが、田舎だということもあって、小さい頃から家ぐるみで一緒にいるような人達の中によそ者の私が簡単に入れるわけもなく、孤立することは多かったです。

また文化や習慣の違いのせいで、友達とすれ違ってしまうこともありました。

留学生という珍しい存在だから、噂を流されることも本当に多く、よく人間不信にならなかったなど今になって自分でも感心しているほどです。何気ない会話を男子クラスメイトと話すだけで、私はその人と付き合っているとかその人のことが好きだとか、陰で言われ、その人のことが本気で好きな女子やその友達に睨まれ、根拠のない噂を流されることが良くありました。せつかく仲良くなれた友達もその噂を否定できるほど私を知っているわけではないので、その噂を真に受けてしまっていました。そんな留学生という不利な立場にもめげず友達とひたすら話して親しくなることで、それらの障害も乗り越えることができました。

こんな慌ただしいアメリカでの一年、私が心がけていたことが三つあります。一つ目は強引にでもポジティブになることです。私は何事に対してもネガティブになる傾向があり、日本の友達には病気だと言われるほどです。留学先には、当たり前ですが、そのネガティブ思考のストッパーとなってくれるような親友や家族はいません。なので、私はどんなにつらい経験をして、ベッドで泣くことと夕飯を食べないことを自分自身に許す代わりに、「これはここでしか、今しか、私にしかできない貴重な経験なのだ。だから楽しまないで損だ。」と言い聞かせ、笑顔でいることをルールにしました。

二つ目は、開き直すことです。「私は日本人なのだから、アメリカ人ではないのだから、留学生なのだから、女子校出身なのだから、仕方ないじゃん」と開き直っていました。

三つ目は、ホストスクールの先生の一人に言われた言葉を自分に言い聞かせることです。「That's the life それが人生よ」というものです。あまりにもシンプルなもので、決して心に残るような名言ではないかもしれませんが。ホストスクールから一番下の学年の生徒たちと学力試験を受けるように言われ、イタリア人の留学生の子と一緒に「留学生である自分たちは受ける必要はないはずだ」と愚痴をこぼしていた時に言われた言葉です。私はこの言葉のあまりのシンプルさに呆然としました。頑張っていて燃えていた松明の火が鼻息で消されたようなあつけなさがあったと言えればわかりやすいでしょうか。何事に関しても諦めることはあまり良い気はしませんが、こういう開き直し方をするのは自分を苦しめないためにはいいと思いました。

不登校で、人と関わることを避けることを止め、この恵泉を一年離れ、異国の留学生になるという大きな変化を私は経験しました。これはコミュニケーション

ヨンの苦手意識を克服することや精神面で強くなることに繋がりましたし、自分と向き合う時間にもなりました。しかし、これが多面的に見て完全に良い変化だったかどうかは分かりません。「変わったね」と皮肉交じりに小学校の友達には言われてしまい、最近では連絡も取れなくなりました。

この夏に新しい学年の人たちと行った修養会のグループディスカッションではそんなことを「変化」というテーマに沿って話しました。色んな意見を聞いていく中で、どの面からみてもいい、完璧な変化を遂げることはできないことを知りました。だからこそ、自分の考えをもって、正しいと思うことをしていこうとも思いました。

こういう考えまで行きつくに至ったのは、十八年間このように慌ただしい人生を送ってきたからこそだと思います。不登校じゃなかったら、英会話を頑張ろうと思わなかったら、留学しなかったら、修養会に行かなかったら、こんな考えは持たなかったでしょう。人生の一秒一秒が本当に大切なのだと思います。「ここでしか、今しか、私にしかできない貴重な経験なのだ。だから楽しもう」と思うこと、「That's the life」と開き直ることは留学を終えた今でも大切にしているポリシーです。残り僅かな恵泉生活、受験を控え、気持ちが落ち着かないことはたくさんあると思いますが、これらのポリシーを持って、自分らしく生きていこうと思います。